

佐賀県教育センター 所 報

No.62

も く じ

○ 巻頭言「創造性と想像性を」	1
○ 平成5年度佐賀県教育センターの機構と担当者・新任所員の紹介	2
○ 平成5年度佐賀県教育センター研究発表会概要	3
○ 教育基礎調査Ⅷ「児童・生徒の学び方に関する調査研究」	4
○ 平成4年度教育実践・研究記録入選論文の紹介	8
○ 平成4年度長期研修生「教育実践レポート」	11
○ 平成5年度教育センター研究主題と研究委員の紹介	13
○ 教育相談Q & A「再登校へ向けて!!」	14

巻 頭 言

創造性と想像性を

佐賀県教育センター 所長 村 山 勝



今日、わが国の教育は大きな転機を迎えているといえる。

ここ10年来、臨時教育審議会を中心とするいくつかの教育改革案が示されており、それに応じて学校教育にも大きな変化の波が押し寄せている。まさに、21世紀に向けて、新しい教育はいかにあるべきかという問いかけがなされているのである。

最近、よく「第三の教育改革」ということがいわれている。これは、近年の一連の教育改革を総称して呼んでおり、明治維新後の「第一の教育改革」、第二次大戦後の「第二の教育改革」に比べるとその政治的、社会的背景は異なっている。今日の急激な社会的、政治的变化は、国民の意識や教育理念に大きな変革をもたらし、教育においては、量的な拡大から質的な充実へ形式的な平等から実質的な平等へという質的転換が求められている。したがって、教育改革は、内容のみならず、制度面にも踏み込んだ、教育界に発想の転換を求めるものである。

本県教育の基本方針を見ると「個性と創造性を育み、豊かな心を培う学校教育の推

進」が掲げられ、その具体的内容として、

1 教育内容の充実

(1)豊かな人間性を培う心の教育の充実
(2)自己教育力の育成と、個性と創造性を伸ばす教育の推進
(3)学力向上方策の推進
(4)国際化、情報化に対応した教育の推進
(5)活力ある学校教育の推進

2 教職員の資質の向上

3 学校施設・設備の充実

があげられている。

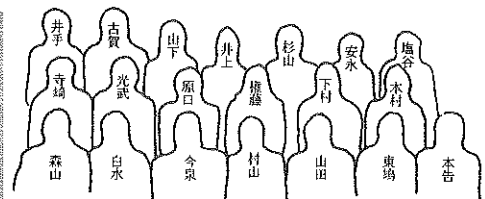
本教育センターは「教職員の資質の向上」に大きな役割を担っており、所員一人一人が、本県教育の基本方針を十分理解し、その実現に向けて努力する必要がある。「第三の教育改革」は、本教育センターにとっても講座内容の見直しや、事業の在り方等について再検討する機会を与えたものといえよう。

ドイツの哲学者ニーチェは「脱皮できない蛇はほろびる、その意見をとりかえて行くことをさまたげられた精神も同様だ」と述べている。発想の転換が求められている今日、創造性と想像性をもって研修、研究をすすめて行きたいものである。

平成5年度 佐賀県教育センターの機構と担当者

課	氏名	分掌事務	課	氏名	分掌事務
所長	村山 勝	所総括	教育課程係	黒木 正孝	道徳 学級経営 (小)
次長	迎 巖	所長補佐		福山 康登	初任研 (高)
課長	三浦 清輝	課総括		宮原 昌佳	初任研 (特)
総務課	係長 三浦 清輝	(本務・総務課長)	指導係	長森 君代	指導相談企画調整 教育相談 (中)
	庶務 中村美沙子	庶務・会計		八田 洋子	教育相談 (小)
	藤崎 靖夫	会計・庶務		芦田 修一	生徒指導 (高)
	野口 順子	会計・庶務		森山 洋一	適応指導 (中)
	課長 蒲原 安則	課総括		光武 光雄	適応指導 (小)
	係長 千手 正秋	短期研修企画調整 英語 (高)	相談係	小山 正己	教育相談 (高)
	山田 裕章	国語 (高)		島 英彰	特殊教育 (小)
	緒方真智子	音楽 (小)		森田 弘子	教育相談 (中)
	天野 昌明	算数 (小)		今泉 正喜	適応指導
	下村 哲也	図画工作・美術 (中)		原口 明子	適応指導
	朝長 省吾	英語 (中)	課長 江藤 周二	課総括	
	中村 和彦	生活 (小)	係長 橋本 孝	情報処理教育企画調整 工業 (高)	
	権藤 順子	国語 (小)	山崎 昭典	電算機システム管理・研究 商業 (高)	
	安永 伴吾	国語 (小)	島 公二武	資料収集 NC管理・研究 工業 (高)	
	塩谷 北海	社会 (中)	山口 郁雄	生徒実習 農業 (高)	
	池田 渉	社会 (高)	係長 大島 正豊	教育情報システム管理運営・研究 CAI (高)	
	係長 森永 和雄	長期研修企画調整 化学 (高)	川崎 健二	教育情報 CAI (中)	
	古藤 倫彦	理科 (中)	古川 美樹	教育情報 CAI (小)	
	東嶋 徹	物理 (高)	井上 常茂	教育情報 CAI (高)	
	坂本 兼吾	生物 (高)	山下 利秀	教育情報 CAI (高)	
	草場 浩	理科 (小)	古賀 敏文	教育情報 CAI (高)	
	本村 正信	理科 (小)	杉山 茂	教育機器管理・研究 教育工学 (高)	
	本告 正澄	地学 (高)	係長 平片日出生	教育資料企画調整 国語 (中)	
	課長 迎 巖	(本務・次長) 課総括	貞包 弘章	社会 (小) 生活	
	係長 吉村 修	研究調査企画調整 学校経営 (小)	植松 正鋼	数学 (中)	
	宮崎 崇	へき地教育 校内研究 特別活動 (小)	井手 和恵	技術 (中)	
	白水 信崇	初任研 学年経営 特別活動 (中)	金丸千壽子	家庭 (高)	
	直島 信明	初任研 (小) 特別活動 (小)	矢ヶ部清人	数学 (高)	
	寺崎 武利	教育評価 学級経営 (小)			

平成5年度 新任所員の紹介



() 内は前所属

村山 (県学校教育課長)
森山 (昭栄中学校教諭)
今泉 (城南中学校校長)
東嶋 (佐賀北高等学校教諭)
寺崎 (鳥栖小学校教諭)
原口 (大和養護学校講師)
下村 (城東中学校教諭)
井手 (南波中学校教諭)
山下 (佐賀工業高等学校教諭)
杉山 (佐賀農業高等学校教諭)
塩谷 (伊万里中学校教諭)

白水 (城東中学校教諭)
山田 (武雄高等学校教諭)
本告 (小城高等学校教諭)
光武 (福添小学校教諭)
権藤 (若楠小学校教諭)
本村 (本庄小学校教諭)
井上 (鹿島実業高等学校教諭)
安永 (大良小学校教諭)

平成5年度佐賀県教育センター
研究発表会概要

開会式での県教育長あいさつ

平成5年度第14回佐賀県教育センター研究発表会5月14日(金)に本教育センターで開催された。

本研究発表会では、午前中に開会式・表彰式(平成4年度「教育実践・研究記録」入選者の表彰 ※P 8~10参照)と「児童生徒の学び方に関する調査研究」(※P 4~7参照)の全体発表が行われた。午後からは分科会に分かれ、今日的な教育課題について発表と協議が熱心に行われた。年々、教育に携わる先生方の努力と研鑽の積み重ねが深まりをみせ、盛会裡に終了した。

なお、本年度の参加者は全体会約180名分科会のべ人数約400名であった。

○日 程

9:30 10:00	10:30 10:50	12:00 13:00	14:20 14:40	16:00
受付 (30)	開会式 表彰式 (30)	休息 (20)	全体発表 (70)	分科会発表A (80)
		昼食 (60)	休息 (20)	分科会発表B (80)
				(分科会ごとに開会)

○開会式・表彰式 (10:00 ~10:30)

- ・開 式
- ・教育実践・研究記録入選者(平成4年度)の表彰
- ・所長のあいさつ
- ・県教育長のあいさつ
- ・閉 式
- 諸連絡

○全体発表 (10:50~12:00)

領域等	研究主題	発表者
教育基礎調査	児童・生徒の学び方に関する調査研究	前所員 長野代志美

○分科会発表A (13:00~14:20)

番号	領域等	研究主題	発表者
1	国際理解教育	国際的視野をもった人間性の育成に関する研究 ~教科指導や交流活動を通して~	所員 森永 和雄 " 貞包 弘章 " 宮原 昌佳 " 坂本 兼吾
2	小学校国語	短作文指導における意欲喚起・技能定着に関する研究	前所員 川原田賢二郎 所員 権藤 順子
3	小学校図画工作	小学校における図画工作科鑑賞指導の展開と工夫 ~高学年の独立した鑑賞指導の一方策~	前所員 桑原 玄二
4	小学校CAI	小学校におけるパソコンの教育利用について ~教育用ソフトウェア評価にかかる調査等の回収と集計用プログラムの開発~	所員 古川 美樹 所員 大島 正豊

番号	領域等	研究主題	発表者
5	中学校数学	数学を活用する態度を育てる指導法の研究 ~課題学習的な授業展開を通して~	所員 植松 正鋼 所員 白水 信崇
6	中学校理科	県産淡水魚種の教材化をめざして ~分布・食性にに関する研究~	所員 古藤 倫彦
7	高校 社会	日本の中・近世における文学史学習指導法の研究 ~茶道文化を中心として~	所員 池田 渉
8	高校 英語	聞き取る能力を伸ばし、読み取る能力の向上に生かす指導の工夫	所員 千手 正秋
9	小学校社会	「学ぶ力」を育てる社会科授業の試み ~特別活動・各教科の中で環境教育をどう進めたらよいか~	神埼小学校教諭 秋吉 洋志
9	環境教育	自然に優しい生活を目指した環境教育 ~特別活動・各教科の中で環境教育をどう進めたらよいか~	大浦小学校教諭 樋口 作二

○分科会発表B (14:40~16:00)

番号	領域等	研究主題	発表者
10	小学校社会	他国理解を深める指導に関する研究 ~6年生の指導を通して~	所員 貞包 弘章
11	教育工学	教材としてのビデオ番組の制作 ~小学校理科~	前所員 森永宗男 前所員 松尾雅則
12	中学校国語	音声言語の学習指導の展開と工夫	所員 平片日出生
13	中学校CAI	中学校におけるパソコンの教育利用について ~パソコン通信を用いた教育用データの流通に関する研究~	所員 川崎 健二 所員 大島 正豊
14	高校 数学	高等学校生徒の学力に関する研究(数学) ~数学検定学力テストをとおして~	所員 矢ヶ部清人
15	高校 理科生物	高校生物における陸水生系の教材化の試み	所員 坂本 兼吾
16	高校CAI	高等学校におけるパソコンの教育利用について ~教育用ソフトウェアのデータベース化を図るシステムプログラムの開発(3)~	所員 大島 正豊 所員 川崎 健二 所員 古賀 敏文
17	小学校国語	豊かに読みを深める国語科の指導 ~互いの読みをみかきあう活動の場を工夫して~	平山小学校教諭 峰 文子
17	小学校国語	先生! 作文が好きになったよ ~子どもが気軽に、いつでも、どんなことでも書ける「書き広げ」の実践から~	武雄小学校教諭 山崎 健彦
18	教育評価	評価の客観化・科学化に向けての具体的工夫 ~算数科における「関心・意欲・態度」の評価を通して~	福富小学校教諭 福富 博茂
18	高校 社会	世界史学習における「風土論」の展開 ~視聴覚教材を利用して~	佐賀西高等学校教諭 坂 敏浩



平成4年度「教育実践・研究記録」入選者

上段左から
太良町立大浦小学校 教諭 樋口 作二
県立佐賀西高等学校 教諭 堀 敏浩
福富町立福富小学校 教諭 堀 富博
下段左から
相知町立平山小学校 教諭 峰 文子
武雄市立武雄小学校 教諭 山崎 健彦
神埼町立神崎小学校 教諭 秋吉 洋志

教育基礎調査Ⅷ

「児童・生徒の学び方に関する調査研究」

鳥栖市立鳥栖西中教諭(前所員) 長野 代志美



はじめに

これからの学校教育は、自己教育力の育成が強く求められています。佐賀県教育センターでは、平成2年度以来3年間、自己教育力を構成する「学び方」についてその内容および構成要素を明確にすること、さらにそれにかかわる児童生徒の実態を明らかにする調査研究を進めてまいりました。そして、その結果は、全国教育研究所連盟第14期共同研究「子どもの可能性を拓く学習指導と評価に関する総合的研究」第2回全国集会(福井大会)、平成5年度佐賀県教育センター研究発表会において発表しました。本稿は、その結果を要約したものです。この調査研究は、児童生徒自身に、その意識を規範面と実践面から問うとともに指導や助言すべき立場にある教師についても調査をして、教育指導に当たっての課題を明確にすることに努めました。児童生徒の「学び方」の実態を知り、指導のひとつの手がかりとして、活用いただければ幸いです。なお、詳しいデータなどは、『佐賀県教育センター研究紀要第17集別冊』において報告しておりますのでそれをご利用ください。図表Noは紀要でのNoを示しています。

1 調査研究の趣旨と概要

本調査研究は、自己教育力の構成要素のひとつである「学び方」に視点をあて、児童生徒の実態をとらえるとともに、学び方の育成の手がかりを得ることを目的として実施した。また、小・中・高校の変化・特徴を把握し、学力の視点からもその実態を明らかにし、この調査研究が実際に各学校で教師が指導するために、具体的な分析考察ができるように調査分析方法を工夫した。

その留意点としては、

①「学び方」は14項目から構成されていると考え、各項目ごとに問題場面を設定し、問題1で「規範意識：どのような学び方がより望ましいか、よりよい規範と言うべき

ものが判っているかどうか」を4段階の選択肢で、問題2で「実践意識：より望ましいことが、たとえ判っていたとしても実際にそれを行っているかどうか」問題1と同様4選択肢で測定した。

②学習成績を取り入れ、学習成績上位群(学習成績A)と下位群(学習成績C)のもつ特徴や差をみることにより、上記の分析考察をより特徴的に進めようとした。

③『教研式SET自己教育力指導検査』を実施し、SETとの相関をとることにより本調査研究の考察を深めることとした。

《図Ⅱ-1 学び方構成要素関係図》

《調査対象》佐賀県内の小学3、5年生、中学1、2年生、高校1、2年生およびその学級担任

《調査時期》平成3年11月

《調査方法》学校通しによる質問紙調査

2 結果と考察

分析に当たっては、児童生徒の規範意識と実践意識、教師観察、学習成績を視点にして考察した。

【分析1】規範意識、実践意識、教師観察「規範意識」(表1-1、表1-2)

本県の児童生徒は、学び方の14項目についての「規範意識：いちばんよい学び方が判っているか」は、小学校の児童(小学校5年生)でかなりの程度まで理解されているとみられる。項目についてみると、小3では、「③コミュニケーション」「⑦学習環境」「⑫学習法の評価」「⑭評価の活用」が不十分である。小5で、上記の項目もほぼ形成されるとみてよいであろう。中学校では、「④意図的努力」「⑨情報の活用」などに小学校より一層の理解の深まりがみられるが、「⑧技術」「⑩応用」「⑪創意工夫」「⑫学習法の評価」「⑬学習結果の評価」については停滞している。高校では、中学校とほぼ同じ傾向だが、高2の「⑩応用」「⑫学習法の評価」は注目すべきであろう。

「実践意識」

学び方の「実践意識：実際の行動や考え」は、当然のことだが全ての学年で低い傾向がみられる。項目についてみると、小3で、「④意図的努力」「⑤計画」「⑬学習結果の評価」「⑪創意工夫」はかなりの高い。だが、小学5年生では、望ましいタイプは「⑬学習結果の評価」のみになる。中学校では、「③コミュニケーション」「⑥反復・継続」にみられるように、幾分低すぎるとおもわれる項目が目立つ。高校では、中学校の上記の項目に加えて「④意図的努力」「⑦学習環境」「⑭評価の活用」などに低さが目立つ。(表1-3、表1-4)

「教師観察」

学び方の「教師観察：学級担任による日常の行動観察」は、実践意識に近いパターンとなっている。項目についてみると、「⑬学習結果の評価」は、全ての学年で高い。「④意図的努力」「⑤計画」「⑥反復・継続」「⑧技術」「⑨情報の活用」「⑭評価の活用」については全学年で低い。これは、教師の児童生徒を見る目が現実には子どもがやっていることに向き、それを中心に判断していることを示している。(表1-5、表1-6)

【分析2】規範意識と実践意識のズレ

規範意識と実践意識の差をみると、実践意識が高い児童生徒が多い。この結果は当然としても、実践意識が高い児童生徒が、学年が進むとともに少なくなるとはいえ、学習成績Cにみられることは指導のポイントの1つであると思われる。つまり、自己理解の甘さ「やっているつもり、判っているつもり」がここに示されている。学習成績Cの児童生徒への正しい自己理解の指導が必要である。実践意識が高い児童生徒の規範意識と、実践意識の差が大きい項目をみると、「④意図的努力」「⑤計画」「⑥反復・継続」「⑧技術」「⑭評価の活用」などである。学習成績による違いは差はほとんどみられないが、「Ⅱ基本的学習習慣」「Ⅲ学習方法の習得」の領域が多いことが目立っている。この原因は、自己理解の厳格さと、学び方の実践が多様化してくることによるものと思われる。規範意識が高い児童生徒

の規範意識と、実践意識の差が大きい項目が、学習成績A、C共に、中高になって増えることに注目したい。これらの項目は、中学、高校でも具体的に学習の仕方を指導する必要がある。(図2-1、表2-1、2、3、4)

【分析3】規範意識と教師観察のズレ

規範意識と教師観察の差をみると、規範意識が高い児童生徒が多い。だが、教師観察が高い児童生徒が学習成績Aにみられる。これは、自己理解の厳格さと教師観察の甘さによるものと思われる。学習成績Aの児童生徒への正しい自己理解の指導と同時に教師の行動観察の客観性が求められる。

【分析4】実践意識と教師観察のズレ

実践意識が教師観察より高い児童生徒(過大評価)は、学習成績B、Cに多く、学年が進むとともに減少する。実践意識が教師観察より低い児童生徒(過小評価)は、学習成績A、Bに多く、学年が進むとともに増える。過大評価する児童生徒の学習成績Aに実践意識と教師観察の差の小さい項目が多く、学習成績Cに実践意識と教師観察の差の大きい項目が多い。これは、教師観察のハロー効果や峻厳効果への反省の必要性を示している。過大評価する児童生徒の実践意識と教師観察の差の大きい項目をみると、学習成績Aでは、「④意図的努力」「⑤計画」「⑧技術」「⑨情報の活用」などである。学習成績Cでは、「②課題把握」「④意図的努力」「⑤計画」「⑧技術」「⑨情報の活用」「⑬学習結果の評価」などである。この原因は、児童生徒の自己理解の甘さと教師観察の低さによると思われる。そして、その自己理解の甘さは、発達段階、経験の有無に起因すると考えられる。過小評価する児童生徒の学習成績Aに実践意識と教師観察の差の大きい項目が多く、学習成績Cに実践意識と教師観察の差の小さい項目が多い。これは、教師観察のハロー効果や峻厳効果への反省の必要性を示している。過小評価する児童生徒の実践意識と教師観察の差の大きい項目をみると、中高になるとその項目が増える。学習成績Aでは、「①理解知識」「②課題把握」「③コミュニケーション」「⑥反復・継続」「⑩応用」「⑭評価の活

用」などである。学習成績Cでは、「③コミュニケーション」「⑩創意工夫」などである。この原因は、児童生徒の自己理解の厳しさと教師観察の甘さによると思われる。そして、その自己理解の厳しさは、児童生徒の要求水準の高さに起因すると考えられる。ここでも、児童生徒への正しい自己理解の指導と同時に教師の行動観察の客観性が求められる。(図4-1、表4-1、2、3、4)

【分析5】教師観察と学習成績からみた学び方

教師観察が高い児童生徒(教師観察の平均点が3.1以上)は、学習成績Aが多い。教師観察が低い児童生徒(教師観察の平均点が1.9以下)は、学習成績Cが多い。教師観察は成績が上位の児童生徒に高く、下位の児童生徒に低い。このことは、教師観察が成績に影響を受けていることを示している。教師観察が高く学習成績Aの児童生徒と、教師観察が低く学習成績Cの児童生徒の規範意識と実践意識の差の大きい項目をみると、同じ傾向がみられる。これは、教師観察の高低や学習成績に関係なく「判っているが、できていない」ことであり、いちばん良い学び方を教師が指導する場合、学習成績の差をそれ程考慮しなくても具体的内容であれば児童生徒は、等しく判ってくれることを示している。教師観察が高く学習成績Aの児童生徒と、教師観察が低く学習成績Cの児童生徒の規範意識と教師観察の差をみると、教師観察が高く学習成績Aの児童生徒は、その差が小さい項目が多く、教師観察が低く学習成績Cの児童生徒は、その差が大きい項目が多い。これは、教師観察のハロー効果や峻厳効果への反省が必要なことを示している。教師は、成績にとらわれない日常の行動観察が求められる。教師観察が高く学習成績Aの児童生徒と、教師観察が低く学習成績Cの児童生徒の実践意識と教師観察の差の大きい項目をみると、教師観察が高く学習成績Aの児童生徒は、教師観察が高い項目のみである。教師観察が低く学習成績Cの児童生徒は、実践意識が高い項目のみである。このことは、教師観察のハロー効果や峻厳効果

などへの反省の必要性を示している。また、教師観察が高く学習成績Aの児童生徒は、自己理解が厳格であり、教師観察が低く学習成績Cは、自己理解が甘いことを示している。児童生徒への正しい自己理解の指導が必要である。(図5-1、表5-1、2、3、4、5、6、7)

【分析6】学び方と学習成績との関係

学習成績を規定する項目は、「①理解・知識」「②課題把握」「③コミュニケーション」「④意図的努力」「⑤計画」「⑥反復・継続」「⑧技術」「⑨情報の活用」「⑩応用」「⑭評価の活用」の10項目である。小学校では、「②課題把握」「①理解・知識」「④意図的努力」「③コミュニケーション」の順で関係がある。中学校では、「①理解・知識」「②課題把握」「⑥反復・継続」「⑧技術」の順で関係がある。高校では、「④意図的努力」「⑥反復・継続」の順で関係がある。

(表6-1、2、3、4、5、6)

【分析7】学習成績と自己教育力との関係

学習成績と関係あるSETの特性は、小学校で「⑤集中力」「②主体的思考」「総合」「④自己評価」「③学習の仕方」の順である。中学校では、「②主体的思考」「③学習の仕方」「①課題意識」「⑩自己実現」「総合」「④自己評価」の順である。しかし、学習成績と自己教育力、学び方との関係は弱い。このことは、今日の学校では、児童生徒の自己教育力およびその構成要素のひとつである学び方の諸能力がそのまま発揮される場が少なく、他律的に学んでいる状況を反映しているとみなされる。(表7-1、2、3)

3 学び方育成の手がかり

(1) 児童生徒

本県の児童生徒の学び方の規範意識は、小学校(小学5年生)段階である程度形成されている。しかし、中学校で「⑧技術」「⑩応用」「⑪創意工夫」「⑫学習法の評価」「⑬学習結果の評価」などに、低下ないし停滞傾向がみられる。そこで、教師は、これらの項目については、これぐらいのことはわかっていると判断するのでなく、「⑧技術(望ましいノートの取り方)」の例のように、小中高校の発達段階にあわせた学び方の具体的な指導が必要である。特に中学校

では、教科ごとの学び方を指導することが大切である。次に、実践意識は、学年進行に伴い低下する項目が「Ⅱ基本的学習習慣」「Ⅲ学習方法の習得」の領域に目立つ。また、実践意識が教師観察より高い児童生徒(過大評価)、実践意識が教師観察より低い児童生徒(過小評価)の存在がある。教師は、実践意識が教師観察より高い児童生徒には、「②課題把握」「④意図的努力」「⑤計画」「⑧技術」「⑩応用」について、学び方の具体的な方法を身につけさせることに工夫を図りながら、発達段階を考慮した正しい自己理解を指導することが大切である。「⑨情報の活用」については、授業で情報を収集し活用する経験をさせながら指導していくことが求められている。さらに、教師は、実践意識が教師観察より低い児童生徒(過小評価)には、「①理解・知識」「②課題把握」「④意図的努力」「⑥反復・継続」「⑩応用」について、学習の満足感や成就感を味わわせる工夫を図りながら、適度の要求水準をもつよう指導をすることが大切である。(表Ⅲ-1、2)

【学び方の指導の留意点】

《ア 規範意識が実践意識より高い子》

⇒本来もっている可能性に気づかせ、内発的意欲を喚起し、努力を促す。

《イ 実践意識が規範意識より高い子》

⇒正しい自己理解を教え、努力を賞賛する。

《ウ 規範意識が教師観察より高い子》

⇒その子のもつ大きな可能性を伝え、実態に即して指導する。

《エ 教師観察が規範意識より高い子》

⇒その子の努力の様子を具体的に伝え、これからに向けて励ます。

《オ 実践意識が教師観察より高い子》

⇒自信をもたせながら、思い上がりをいましめる。(過大評価)

《カ 実践意識が教師観察より低い子》

⇒本来もっている可能性に気づかせ、その点を知らせ励ます。(過小評価)

《キ 教師観察が高く学習成績Aの子》

⇒これからは体験を通した学び方が大事であることを判らせる。具体的な例を上げてその子のよさを認め、さらにその子なり

の新しい課題を希望の形で示す。

《ク 教師観察が低く学習成績Cの子》

⇒不審の原因を指摘して、改善のための具体策を示す。得意な面を認めてやり、励ましてやる気を起こさせる。

(2) 教師

教師は、児童生徒に学び方の規範面と実践面の両面から指導する必要がある、その指導力を高めることが大切なことは言うまでもないことである。今回、児童生徒の日常の行動観察より教師観察が、学習成績が高い児童生徒に甘く、成績が低い児童生徒に厳格になっていると指摘がされた。教師は、学習成績が高い児童生徒に「①理解・知識」「⑩応用」「⑬学習結果の評価」について高い評価をし、学習成績が低い児童生徒に、「②課題把握」「④意図的努力」「⑥反復・継続」「⑧技術」「⑨情報の活用」「⑩応用」「⑭評価の活用」で低い評価をしている。特に、成績の低い児童生徒を厳しく評価している。教師は、この指摘を率直に受け止め、正しい児童生徒理解に努めることが重要である。

(3) 教育課程

これからの学校教育においては、自己教育力の育成を図ることが強く求められている。本県の児童生徒の学び方および自己教育力と学力との関係は、決して強くなかった。その実態と学校の創意工夫を生かした教育課程の編成が求められていることを合わせて考えると、各教科の各学年、各分野の指導内容について重点の置き方に工夫し、教材等の精選を図る必要がある。また、その指導に当たっては、具体的な学び方(学習方法や学習の順序)を指導できる体験的な活動を重視するとともに、学習内容の習熟の程度に応じた指導など個に応じた指導方法の工夫改善が求められよう。

おわりに

本調査研究について、調査結果の解釈、調査用紙などに関して質問がある場合は、下記へ問い合わせ下さい。

佐賀県教育センター研修二課教育経営係

〒840-02 佐賀県大和町川上

☎(0952)62-5211

平成4年度「教育実践・研究記録」入選論文の紹介

小学校国語科

豊かに読みを深める国語科の指導～互いの読みをみがきあう活動の場を工夫して～
相知町立平山小学校 教諭 峰 文子

読みの中に、読む、書く、聞く、話す活動を互いに関連させた活動の場、互いの読みをみがきあう場を設定すれば、子どもたちの読みは、さらに深まったものになるのではないか。という仮説を立て、本研究に取り組んだ。

1 読む、書く、聞く、話す活動の関連指導のねらい

- (1) 日常生活の中においても、生き生きと展開できるような言語生活力を身に付ける。
- (2) 個人の読みを大切にしつつ、個と個とのかかわりを深める場を設定することによって、なお一層、全体の読みを深める。
- (3) 活動の関連を図ることによって、それぞれの活動への興味、関心を高め、四つの活動の力をそれぞれに伸ばしていく。

2 読む、書く、聞く、話すの具体的な関連活動

- (1) 書きながら読む活動－吹き出し 感想 日記 手紙
- (2) 話し合いを生かして読む活動－音読 朗読 動作化
- (3) 聞きながら書く活動－メモ 聴写
- (4) 読みながら書く活動－視写 書き込み サイドライン
- (5) 聞き比べる活動－自分の内容と比べる
- (6) 書いたことを話す活動－書いたものを見て発表する

3 授業展開の工夫

- ①学習課題の確認
- ②書く活動（自分の考えをつくる）
- ③みがきあう場（発表し合う 聞き合う メモを取る 音読 動作化）
- ④さらに書く活動（深める 見直す ふくらませる）

まだまだ十分な成果をあげるまでには至っていないが、今後、残された課題にさらに取り組みながら、子どもたち一人一人がなお一層目を輝かせ、生き生きと活動でき

る授業展開の工夫を試みていきたいと考えている。

小学校国語科

先生！作文が好きになったよ
～子どもが気軽に、いつでも、どんなことでも書ける「書き広げ」の実践～
武雄市立武雄小学校 教諭 山崎 健彦

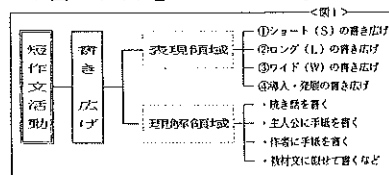
本研究は「作文を書くことが好き、楽しい」という子どもを育てるための方策とその指導の在り方を「書き広げ」を通して明らかにした。

【研究の実際】

(1) 「書き広げ」とは

作文を書くために必要とされる“表現技能”の習得や技能を使って作文を書く活動ではなく、多種多様な題材で書かせる「短作文活動」のこと

(2) 「書き広げ」のとらえ方



(3) 「書き広げ」実施のためのキーワード

- ①多作化・多量化
・作文をいつでも、どんな時にでも、どんどん書かせましょう。
- ②教材化
・子どもが喜んで、楽しんで書ける素材を見つけ、題材を作りましょう。
- ③誘発化
・子どもが書きたくなる仕掛け言葉を作りましょう。
- ④賞賛化
・作文を書く意欲が高まるようにほめましょう。
- ⑤保存化
・作文は保存し、最後は「世界にたった一冊しかない個人文集」へ

【研究のまとめ】

「書き広げ」の導入により子どもの作文好きが増えた。さらに研究を深めたい。
・好き～4月は11名、10月は32名

小学校社会科

「学ぶ力」を育てる社会科授業の試み
神埼町立神埼小学校 教諭 秋吉 洋志

1 主題設定の理由

子どもたちが主体的に学んでいくためには、問題意識を十分に掘りおこし、調べていく方法を体得させていくことが大切である。調べてみたい切実な問題を主体的に追究していくことによって、学習技能が身につく、「学ぶ力」が向上していくものと考えた。

2 研究の内容

- ・児童が意欲をもって取り組む課題提示の工夫
- ・児童が継続的に追究活動を展開していく学習課程の工夫

3 研究の実際

学ぶ力のついた子どもを次のようにとらえた。

社会事象のなかに、自ら問題を発見し、いろいろな方法で納得いくまで追究し、結論に対して、自分なりに判断できる子ども。

「雪国の暮らし」（4年生）「公害とわたしたちの生活」（5年生）の授業実践では、子どもたちの固定観念をゆさぶることにより、調べてみたい切実な問題が成立し、意欲的な追究活動が展開されていた。

学習課程の工夫では、一単元一サイクルの学習過程とオープンエンドの学習過程を設定した。

4 まとめ

- ・課題提示を工夫していくことによって、問題を発見していく目が少しずつ鋭くなっていった。
- ・これからの学習を見通していく力がついていったように思う。
- ・資料の収集、活用がうまくなってきた。
- ・自主的に課題を解決する姿が見られるようになった。
- ・継続的に調べていく「自学」の習慣が身についてきた。

小学校環境教育

自然に優しい生活を目指した環境教育
太良町立大浦小学校 教諭 樋口 作二

1 主題設定の理由

我々教師は、最低限子供の体や命を守るためには、警鐘を鳴らし続けていかなければならないと思う。また、あらゆる社会問題の真実を知り、それを子供たちと共に考えていかなければならないとも思う。さらに子供たちが希望を持って学習できるように、人類の未来をゆらぎのない明るさに満ちたものにしていく使命があるのではないかと考える。そこで、子供たちと共に歩む大浦小の環境教育を考えた次第である。

2 研究の実際

(1) 特別活動での指導

ア 学級活動

環境問題を学習する中心の活動として位置付け、各教科では取り扱わない内容や深く掘り下げた題材の学年別年間指導計画を作成して授業に臨んだ。

- ・授業の実際「せんざい」

イ 児童会活動

①飼育栽培委員会

- ・花、野菜類の栽培 小鳥の飼育

②環境委員会

- ・牛乳パック、アルミ罐の回収

ウ クラブ活動

- ・自然クラブ年間計画及び活動

(2) 各教科の学年別年間計画の作成

各学年・各教科の中で、環境教育が実施できそうな単元を拾い出し、その指導内容を検討し、作成した。

3 PTA・地域との連携

PTAとは、ごみ拾い・古紙回収運動を共に行い、婦人会とは、牛乳パック・アルミ罐回収運動で、大浦漁協とは合成洗剤追放運動で連携を深め、地区全体に環境整備・省資源の声が高まってきた。

4 まとめと今後の課題

小さな取り組みであったが、子供たちの中にも地域にも、少しではあるが環境への意識が高まってきた。今後は、皆が自然に優しい生活をするのが当然と思えるようになるまで努力を続けたい。

高等学校社会科

世界史学習における「風土論」の展開
～視聴覚教材を利用して～
佐賀県立佐賀西高等学校 教諭 堤 敏浩

1 はじめに…「歴史における風土」

「歴史はちょうど芝居のようなもので、そのいろいろの事件の起こった土地は舞台、活動をした民俗は役者にたとえることができる」と、よくいわれる。しかし、従来の歴史学では活躍をした人間にのみ光が当てられ、活動の舞台となった土地(風土)は疎んじられることが多かった。しかし、元来歴史を人間の営みの累積であるとすれば、自然環境(風土)を無視して歴史は語れないのではないか。そこで、ここでは「歴史における風土」を用いて複眼(多角的にものを見る)の育成を試みる実験を行った。

2 なぜ「視聴覚教材」なのか？

新人類ともいわれる生徒達に、過去の事実に対する興味を喚起し、「歴史嫌い」をなくさせるのに映像は大きな力をもつ。また、各々の時代についての正確なイメージを描く上でも効果的であるようだ。最近、音楽・映像に対して素晴らしい感覚(感性)を持っている生徒が少なくない。こうした生徒の感覚(感性)を磨き、映像を通して論理的な思考力を培い、豊かな人格を形成する上でも視聴覚教材は有意義な方法である。

3 研究の実際…実践・研究の経過

- | | |
|-------------------------------------|--|
| ①昭和62年度
「歴史と風土」
[NHK特集 地球大紀行] | ③平成3年度
「人間と宗教」
(ビデオ「十戒」) |
| ②昭和63年度
「中国の古典文明」
[NHK特集 大黄河] | ④平成4年度
「モンゴル帝国の成立」
[NHK特集 大モンゴル] |

4 まとめと考察

詰まる所、歴史はイメージだと思う。それは元々不確実なものである。視点が変われば見えてくる像も変わる。そのため柔軟な思考や創造力をもとに、あらゆる要因をとりあげ多角的に分析・考察することにより「歪みのない歴史像」をつくる必要がある。今回の実践・研究を行なった意図もそこにあったのであり、一応の成果を得たと考えている。「過去と現在の対話」ができるように組み立て、事実と解釈の組み合わせで行われるような授業を目指していきたい。

小学校教育評価

評価の客観化・科学化に向けての具体的工夫
～算数科における「関心・意欲・態度」の評価を通して～
福岡県立福岡小学校 教諭 稲富 博茂

1 主題設定の理由

関心・意欲・態度の評価の在り方は、新指導要領の趣旨を生かす評価をつくり出す重要なものとして位置付けられる。しかし、関心・意欲・態度の評価は、教師の主観的な評価になりやすく、評価結果の解釈も多義的になりやすいなどの問題点がある。

そこで、関心・意欲・態度の評価を体系的に考える具体的工夫を求め、客観的な評価の在り方に迫ろうと試みた。

2 研究の目標

算数科における「関心・意欲・態度」の科学的評価について研究し、客観化への具体的な手段を探る。

3 研究の実際

- (1) 学習指導計画の作成段階への評価計画の位置付け
- (2) 学年・単元・単位時間の各レベルにおける「関心・意欲・態度」の評価規準の作成の手立て
- (3) 単元・単位時間における評価計画の作成の手立て
- (4) 算数科の3・4学年における評価規準の作成

- ① 学年レベルにおける評価規準の作成
- ② 各単元における評価規準の作成
- ③ 単元の評価計画の作成
- ④ 単位時間レベルの評価規準の作成
- ⑤ 単位時間の評価計画の作成
- (5) 多様な評価活動を用いての「関心・意欲・態度」の評価

- ① 評価の方法と評価情報の収集方法・手段
- ② 評定尺度法とプロフィール法による評価資料の分析

- (6) 多様な評価活動の実践
- 4 今後の課題

- (1) 個人内評価に関する研究
- (2) 関心・意欲・態度の評価に有効な子どもの学習状況の研究

「平成4年度 長期研修生・教育実践レポート(小学校特別活動)」

自主的な態度を育てる学級活動の指導

～自己決定の質を高めるための手立ての工夫～

佐賀市立本庄小学校 教諭 南 里 信 幸

1 主題設定の理由

「集団生活の中で周囲と協調して生活する態度が十分身に付いていない子ども」「学習に必要な用具をすれの多い子ども」「進んで家庭学習に取り組めない子ども」の存在があり、これらは自主的な態度を育てるといふ「学級活動の重要な課題」でもある。

またこうした問題は、学級担任として毎年のように解決を迫られている問題でもあり、我々教師は、学級活動を通して、こうした問題に「子どもが望ましい適応」をするように指導していかなければならない。

そこで「自主的な態度を育てる学級活動指導法の研究」という研究主題を設けて研究を行うことにした。

2 研究の目標

自己決定の指導を工夫することによって、自主的に取り組む学級活動の指導法を明らかにする。

3 研究の仮説

学級活動の指導において、自己決定の質を高める手だてを工夫して、指導過程に位置付けていけば、自主的な態度を育てることができるだろう。

4 研究の実際

(1) 指導過程を見直す(授業仮説①)

本時の指導過程の流れの中で、子供一人一人の内的な思考の過程を自己受容、自己理解の過程を通り自己決定に至ると捉えられてきた。

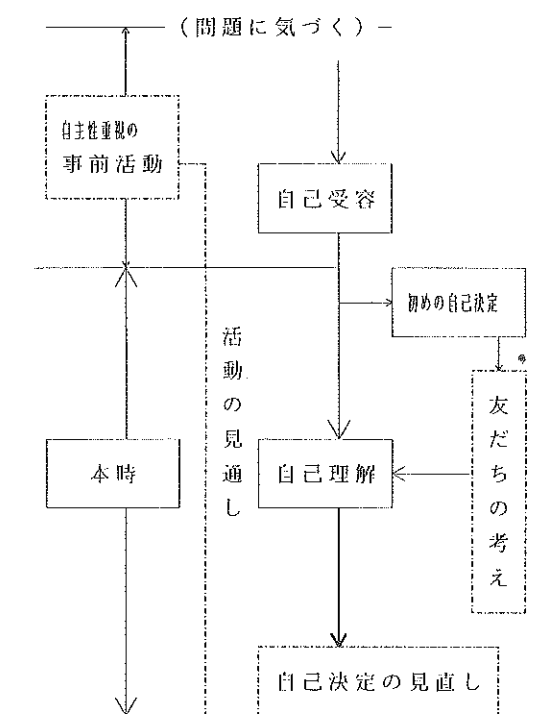
従来は、適応に関する内容においても子供の自主性の尊重といいながらも、本時までは資料を隠し、どこか子供の目の届かないところに保管し、本時に一挙に公開するような指導を展開していた。それは教師中心の指導になってしまっているのではないと思われる。

事前活動の中で、必要な資料は公開し、学習内容の予告をし、本時の話し合う内容

については、教師と子供たちの話合いで決め、見通しの持てる学習を構成してはどうだろうか。

見通しの中には、自分とその問題の関わりについて考える、自己受容も含めるものとする。

〈指導過程と自己決定〉



(2) 自己決定を見直す(授業仮説②)

事前活動の中で、問題を意識化する中で、「自分はどうかしらいいだろうか」という自己決定の意識も、問題に気づいたかなり早い時点から意識するようになるのではないだろうか。

しかし、まだこの「初めの自己決定」は具体性を欠き、実践に結びつきにくいものであると思われる。集団思考の過程の中で友だちの話を聞いて、自分の考えをしだいに横に広げ、また縦に深め、あるいは友だ

ちの考えを取り入れることにより、実践につながり継続するしっかりと自己のこめられた考えとすることができよう。

(3) 検証授業

ア 授業仮説①について

角度	深度	進度	発言内容 (◎成員, ○司会者, ◎指導者)
提案			◎たくさん困っていることがあると思うので、それを出して下さい。解決方法が見つかるかもしれません。
説明			◎家に帰ってテレビとかを見て、宿題ができないんだと思います。
両省賛成			◎同じような意見はありませんか。
両省			◎よくも角々に似ていて宿題をしたあと、遊んだりすればいいと思います。
両省			◎できなくて、忘れて友だちの家にいってかえってきただけ、夜遅くでもしたほうがいいと思います。
両省			◎テレビのほかに友だちと約束したりして、遊んでできないことがあると思います。
両省			◎同じような意見はありませんか。

よい話し合いでは角度、進度、深度のそれぞれに関する発言が、話し合いの内容や順序に応じて、均衡をとってなされると言われている。また、発言の類型や観点が多岐にわたればわたるほど、児童の相互作用が活発に行われ、話し合いが深められたとみなされる。(詳しくは岸田元美著「学級話し合い活動の指導方法」参照)

授業記録の流れのように、発言は一応波型に近く、進度に関する発言が多いことから話し合いの進行はスムーズであった。個々に見ると批判修正、反対の意見がなく思考の深まりとしては今一つである。

子供たちの作文によると、事前活動を重視した指導過程は、かなり見通しをもたせる効果があることがわかった。

イ 授業仮説②について

(ア) 自己決定の見直しのケース

ある子供のはじめの考えをA、取り入れる友だちの考えをB、とすると見直した考えにはいくつかの種類が考えられる。

(イ) 自己決定3つの視点

集団思考を経て見直された考えには、その考えが友だちや自分の何を理解したものに基づくのかによって、大きく3つに分類されるものであることが分かった。①印象的・主観的理解(自己の気持ちを中心において「これからは仲よくしよう、ごめんねとあやまろう」など自己決定したもの。)

〈自己決定見直しのケース〉

1. 自分の考えふくらみ型 (A+B)=AA	4. 自分の考え無変化型 (A+A)=A (A+B)=A
2. 付け加え型 (A+B)=AB	5. 関連性のない変化型 (A+B)=C
3. 取り入れた考えに変化型 (A+B)=B	

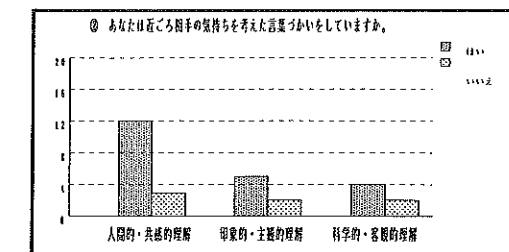
②科学的客観的理解(集団の中でどのような行動をとったらよいかを考え「悪口をいった人を注意する、原因を作らない、いいことか悪いことか考える」自己決定したもの。)③人間的・共感的理解(いわれた人の気持ちを、常に自分の気持ちに置き換え「人に言われていやなことを言わない、自分が言われたときのことを考える」自己決定したもの。)

〈見直しのケースと視点、自己評価の関連〉

	印象的・主観的理解	科学的・客観的理解	人間的・共感的理解	合計	①印象的・主観的理解について	②科学的・客観的理解について	③人間的・共感的理解について
1. 自分考えふくらみ型	4	4	0	8	3	4	1
2. 付け加え型	0	2	4	6	3	2	1
3. 取り入れた考えに変化型	1	1	8	10	6	3	1
4. 自分の考え無変化型	2	0	2	4	4	0	0
5. 関連性のない変化型	0	0	1	1	1	0	0
合計	7	7	15	29	17	9	3

5 研究のまとめ

自己決定を見直しのケースごとに見ると「取り入れた考えに変化型」が多い。次にこれを自己決定理解の視点と重ね合わせてみると、「人間的・共感的理解」をした子どもが過半数を占める。



1週間後に実践の様子を自己評価させたところ「人間的・共感的理解」が一番実践化の度合いが高いことがわかった。どのような指導が「人間的・共感的理解」を育てるのが今後の課題である。

平成5年度

教育センター研究主題と研究委員の紹介

No.	研究領域	研究主題	担当所員	研究委員
1	教育基礎調査	児童生徒の興味・関心と問題解決への意欲に関する調査研究	直島 信明 宮崎 崇他 9名	
2	国際理解教育	人間としての共感を育む国際理解教育の在り方 ～教科指導を通して～	貞包 弘章 平片日出生 緒方真智子	武富 秀之 (緑が丘小) 石像白真由美 (大和中) 伊東 光則 (神崎高)
3	小学国語	音声言語表現能力向上に関する研究	藤藤 順子 安永 健吾	釘本 浩 (附属小) 宮原 久直 (基山小)
4	中学国語	音声言語指導の展開と工夫のために ～論理的思考を育む「対話」指導～	平片日出生	石橋 道秀 (附属中) 宮崎 信仁 (鶴野中)
5	高校国語	小説教材における指導法の研究	山田 裕章	吉田 仁 (唐津北高) 今田 康光 (太良高)
6	小学生生活	生活科の学習の評価に関する研究 ～観点別評価基準の設定と評価活動を通して～	中村 和彦	福岡 徹 (川上小) 古澤 秀樹 (鳥栖小)
7	小学社会	第3次産業の教材化とその指導法の研究 ～5年生の指導を通して～	貞包 弘章	平田 陽介 (芙蓉小) 堀浦朝太郎 (諸富南小)
8	中学社会	学習意欲を引き出す社会科(地理的分野)の指導法の研究 ～身近な資料の教材化をとおして～	塩谷 北海	森田 利幸 (鍋島中) 村山 良秀 (山崎中)
9	高校公民	人格形成に努める実践的意欲を高める授業の工夫 ～生命倫理を通して～	池田 渉	時里 一義 (鳥栖高) 北島 俊郎 (鹿島実高)
10	小学算数	「数理的な処理のよさ」が分かる学習指導法の研究	天野 昌明	國政幸二郎 (明倫小) 柴田 昌範 (若菜小)
11	中学数学	基礎・基本の育成を目指す数学科指導法の研究 ～ティームティーチングを取り入れて～	植松 正綱	池田 山浦 山浦 修 (多良中)
12	高校数学	高等学校生徒の学力に関する実態調査(数学) ～数学標準学力テストを通して～	矢ヶ部清人	廣尾 博見 (武雄青陵高) 岩崎 良子 (伊万里農林高)
13	中学英語	「話す力」を養う指導法の工夫 ～異文化理解指導を通して～	朝長 省吾	三枝 出 (啓成中) 大本由起子 (北茂安中)
14	高校英語	読み取る能力を高める指導 ～パラグラフ・リーディングを中心に～	千手 正秋	田中 清 (致遠館高) 竹森 唯幸 (佐賀西高)
15	小学音楽	豊かな感性を育む創造的な音楽学習に関する研究	緒方真智子	橋崎智恵子 (駒崎が丘小) 田久保理生 (本庄小)
16	中学美術	中学校美術科における鑑賞指導の展開と工夫	下村 哲也	桑原 玄二 (城東中) 杉野 徹 (鍋島中)
17	中学技術・家庭	プログラム作成に関する指導法の研究 ～「情報基礎」領域を通して～	井手 和憲	片波 正志 (田代中) 梶原 英直 (吉田中)
18	小学理科	体感的に学ぶ理科学習の工夫 ～「人の体」の内容について～	岸嶋 浩 本村 正信	岩本 達典 (兜塚小) 岩橋 進 (麓小)
19	中学理科	「自ら学ぶ意欲」を高める工夫 ～生徒が、課題を選択できる学習展開(主に2分野)について～	古藤 倫彦	橋村 浩一 (鳥栖中) 堀田 良正 (山代中)
20	高校理科物理	電磁気分野における実験教材の製作と実験法の工夫 ～コンピュータの活用～	東嶋 徹	植内 椿 徳彦 (有田工高)
21	高校理科化学	新教育課程に対応した化学実験教材の工夫について ～探究活動や課題研究への活用～	森永 和雄	時貞 充尚 (伊万里農林高) 中牟田 昭 (佐賀東高)
22	高校理科生物	生態系分野における佐賀県産小型哺乳動物の教材化の試み	坂本 華吾	池田 健一 (唐津北高) 大宅 利之 (佐賀農高)
23	高校理科地学	佐賀県産火成岩の教材化の可能性について	本告 正澄	向 一字 (伊万里高) 北村 哲一 (唐津東高)
24	小学道徳	児童が共感できる道徳資料に関する研究 ～資料の効果的活用と指導法の工夫～	黒木 直島 吉川 信明	古村 清美 (附属小) 元規 (本庄小)
25	教育評価	小・中学校の観点別評価および通知表に関する研究	寺崎 武利 白水 信義	長野代志美 (鳥栖西中) 堀田 桂子 (堀田中)
26	教育工学	教材としてのビデオ番組の制作 ～高校理科～	杉山 茂 古賀 敏文	森永 宗男 (佐賀農高) 山中 楠王 (武雄青陵高)
27	小学CAI	地域間交流のための効果的な情報ネットワーク利用方法に関する研究	古川 美樹 川崎 健二	竹内 智道 (橘小) 岡嶋 智子 (若菜小)
28	中学CAI	地図データを活用した地域データベースに関する研究	川崎 健二 利秀	平川 年明 (白石中) 井上 英史 (城北中)
29	高校CAI	教育情報システムを利用した共同作業に関する研究	井上 常茂 川崎 健二	松尾 敏実 (致遠館高) 坂本 明弘 (飯本高)
30	教育相談	佐賀県における子どもたちの生活体験に関する調査研究	小山 正己	原口 毅 (成和) 田中 安子 (久間小) 香田 博 (東与賀中) 平山 健治 (盲学校)
31	特殊教育	特殊学級における教育課程に関する調査研究 ～生活単元学習に関する実証的研究～	島 英彰	船津 静哉 (多久東部小) 津田口 裕 (城山中) 天野 浩之 (西郷小) 山添 敏夫 (肥前中)

以下のように訂正いたします。
頁(13)担当所員名覧

安永健吾 → 安永伴吾
誤 正

教育相談Q & A

再登校へ向けて!!

～「いじめ」への対応は、より慎重に～

Q：いきなりM夫の父親がどなりこんでこられました。「M夫は、学校でひどいいじめにあって休んでいる。自転車が壊されたり、服を破かれたり、青あざをつくって帰ってくる毎日が続いたのに、学校はちゃんと指導してくれているのか。担任は連絡もくれない。」学校側も、何かあっている感じはしていたのですが、生徒に聞いても今一つはっきりつかめません。いじめに対して、どう対応すればいいかわからず困っています。

A：学年主任さんからの相談です。「M夫は中学3年生。1年の3学期、父親の転勤でT中学校へ転入してきました。初めは何事もなく登校していると思っていたのですが、2年の中頃よりオドオドした態度で落ちつかず、学校も休みがちになってきました。家庭からも『様子がおかしい。』と何度も連絡が入り、他の子ども達を調べてみるのですが、『別に変わったことはない。』と言います。我々教師も気にはなりながらも『日常の些細なイタズラや、少し度の過ぎたふざけかな。』ぐらいに軽く考え、いじめについては、さほど深刻にはとらえていなかったというのが正直なところ。」と話されました。そこで、M君との話合いをくり返してもらった結果、驚くような事実が浮上してきました。

M君は、中2のころから、後ろから羽交絞めにされて、数人の男子生徒から殴る、蹴るの暴力をうけていたこと、学生服を踏みつけられて靴跡だらけになったり、袖がちぎれる程きづられたりしたこともあったようです。身体のこと女子生徒にからかわれ、それに反発すると男子生徒にこず

きまわされるといった状態でした。先生に訴えた後の仕返しは、陰湿に、大人に見えない形でくり返されたようです。そして、頭に無数のコブを作って帰った翌日から、吐き気と頭痛を訴えて登校を拒否するようになりました。

いじめの対応は、実に難しい問題です。小学校の高学年・中学・高校と成長していくにつれて、自我意識も発達し、子ども達の神経は傷つきやすくなります。先生に相談しても「それくらい誰れにもあるヨ。」「お前もして返せ。」「あいつ（いじめっ子）がそんなことするかなあ、お前が先に手を出したのだらう…」と対応されることはかなり多いようです。先生に知れたことで、仲間のいじめはもっとエスカレートしていった例も数多くあります。

いじめの対応の基本は、まずはじめに「いじめられっ子」の言葉をしっかり受け止めることから始まります。へたな慰めや同情、励ましや言い聞かせなどの対応では、解決にはつながっていきません。また、まわりの子を取り調べたり、注意することで先生は解決したと思い込んでしまいがちです。「いじめられっ子」の訴えてくる言葉を通して、その裏に隠されている子どもの感情の流れや心の痛みをしっかりと受け止めていくことが大切です。人は、丸ごと受けとめてくれる人が一人でもいると、心の底から生きるエネルギーがわいてきます。

いじめから登校拒否に陥った子どもの再登校がかなり難しい例が多いのは、いじめられた子供の側に立った見方が、親や教師の側に不足していることも、原因の一つではないかと思われます。

回
覧

発行 佐賀県教育センター
〒840-02 佐賀郡大和町大字川上字西山
(TEL) 0952-62-5211
(FAX) 0952-62-6404